

私の服にはSTORYがある

CLOSE-UP
AYUKO TASHIRO
HER STORY

私と夫の仕事を
差し置いても 東京では
子育てはできないと
した判断は正解でした

田代佳代子さん

46歳

国際的なマリンバ演奏家の
安倍圭子先生と共演します

最高級のコルサートマリンバを前に、恩師であり、桐朋
学園大学教授の安倍圭子先生と、9月23日の共演コンサ
ートに向けて、頻りに練習に出づきは、打合わせや練
習をこなしています。演奏会用に購入したワイワイア
ン・タムのプラスチック、本番に備えます。何かとお世話
になっているヤマハ銀座ANNEXにて。

もうこの子育てに関しては、田舎がいちばんで東京はレベル以下
ということはありません。彼女もそうは言わないでしよう。ただ、
お強欲とかゆとり教育とか言いつつ前に、子供のために飛ぶのかどうか、

福岡県・久留米市生まれ。6歳の私です。誘われて木琴教室に通ったことがきっかけで、マリンバと出会いました。



安倍先生の演奏を聴いて感動したことから、先生が教授を務める桐朋学園大学に入学。聖子ちゃんカットが懐かしい夏合宿のひとつコマ。



卒業後は同大学の研究科に進み、女性5人のマリンバアンサンブルを結成するなどして、活発に演奏活動を行っていました。

24歳で結婚。夫は演劇科を出て劇団に所属。その劇団で、生バンドの打楽器を担当したことから知り合いました。



26歳で長女を出産。幼い子供を抱えて、東京での生活に疑問を感じ始めた頃。演奏活動にも集中できず、福岡に帰ることを決心。



福岡・久留米で立ち上げたマリンバ教室。少しずつ生徒さんの数も増えて、'99年には初めての発表会を開くことができました。

東京から九州・福岡へ。マリンバ演奏家として将来を期待されていた田代佳代子さんが、生まれ育った土地に帰ってきたのは30歳のときのこと。かたわらには4歳になる娘と、半年かけて説得したご主人がいました。

「夫は役者。演劇だけでは食べていけない、いろんなアルバイトをしていました。私は駆け出しの演奏家。あの頃はほんとお金がかかった。でも、大変だけれど楽しい青春の日々。自分たちが貧しいとか、みじめだと思つたことは一度もありませんでした。ただ、子育てには、あまりにも環境が悪すぎました」

当時住んでいたのは高層マンション。子供の視線で見回すと、壁と、窓の向こうの小さな空しか見えない。緑が見えない。散歩に連れ出せば、蟻の行列におびえる長女。

「環境を変えたいと強く思いました。女と生まれたからには、もう一人子供が欲しい。そのためにも、子供をのびのびと育てられる福岡に帰ろう」と

ところが、東京で役者の夢を追うご主人はなかなか首を縦に振ってくれません。

「夫が、考え抜いた末に決断してくれたのは、やはり子供のためでした」

福岡での生活が始まってみると、新しい環境の中で自分の居場所を先に見つけたのは、ご主人のほうでした。

「地方には演劇人が少ないせいか、とても重宝がられて……、あれよあれよという間にいろんな仕事を頼まれるように」

今では大学の演劇科の教授に。一方、子育てという荷物を背負いながら、ゆっくりとした歩みを強いられたのは佳代子さんでした。

「福岡に戻ってすぐに次女を出産。その後、いよいよ自分のマリンバ教室を立ち上げようと、チラシを配ってみても、一人の生徒も集まらないのです。ピアノ教室ならまだしも、マリンバなんて、ここでは無理なんだ」と

途方に暮れて、私のマリンバ人生、もう終わりです」と、東京の恩師に電話をすると、

楽器店の協力を仰ぎなさいというアドバイス。地元楽器店を訪ね、やっと教室をスタートさせることができました。最初の生徒はわずか2名でした。

以来15年。思いがけず授かった3人目の子供もまとも育てつつ、マリンバ教室では、小学生から60代までを教えています。これまでの生徒数はべ100人超。音大にも11人を合格させました。九州各地での演奏活動も行っています。

そんな佳代子さんに、試練はもう一度、降りかかったのです。3年前の6月でした。

「最愛の父を、交通事故で亡くしました。高速度道を運転中に具合が悪くなったのか、路肩に車を停めたら、トラックが激突してきて炎上するという悲惨な事故でした」

子供の頃からずっと、マリンバを弾く佳代子さんをいちはん応援してくれたのがお父さん。「ショックとストレスで、耳に膜がかかったように音楽が聴こえなくなりました」

教室も演奏活動も休み、気力も尽き果てた数カ月……。けれど、佳代子さんの心を溶かしたのは、やはりマリンバの音色でした。

「安倍先生のCDをかけていたら、最初は聴こえなかった音が、急に耳いっぱいになり、涙がぼろぼろとこぼれてきました。同時に、何をやってるんだ、すっかりしろ、と父に怒られているような気がしてきました。あの目からは生まれ変わりました。それまで、あのまま東京にいたら……、という気持ちを引きずりながら、自分にできる範囲のことをやってきたけれど、父の死を境に、もつと積極的に動き始めました」

佳代子さんの並々ならぬ熱意が周りを動かし、福岡の中心地・天神にも教室を開講することができ、長年の夢であった安倍先生との共演も実現。まるで、種を蒔き、時間をかけて育ててきた植物が花を咲かせ始めたように。「この場所で頑張ってきたからこそ、今の自分がある、そう思えるようになったのです」



子供がのびのびするために 私もノーマルでいられる 場所が必要だったんです



ほかの楽器もそうでしょうが マリンバの音には 私の 生活が鳴り響くんです



亡き父の写真は、いつも肌離れず持ち歩いています。つらいつまは髪でしたが、今では、父が私を守り、行方へき方向に導いてくれているような気がします。



無言で演奏するときの衣装は、ほとんどがワイワイアン・タム。普段は着ないような華やかなトップスを選び、黒か白のパンツと合わせます。



演奏のときに履くのはソニアルダンス用の靴。理由はすべらないから、ゴールドと黒の2足あればどんな服にも合います。かかとか鳴らないよ、カハイをつけて。

子育ての思い出がいっぱい 筑後川の河川敷にて

高校1年生の次女、中学2年生の長男と、昨年、長女が神戸の大学に進学し、現在は2人の子供と夫とともに、この川のほとりで暮らしています。近々にはテニスコートもあり、幼い頃の子供たちの遊び場として、数え切れないほど家族が訪れました。普段着はほとんど「ニム」シャツは福岡・天神のシーンスミン「DIAGONAL」で購入。

リビングはサンルーム 夫も母も和みます
 深く東京を後にしたからと後悔したものは、3人の子供とたくさんのお友達たち、九州での演奏仲間。それに、7年前に買ったこの家。近くに住む母の存在も重要です。



教え子たちが成長し一緒に演奏会を開けるまでに

マリンバは、なんと解体することができるんですよ。音板には、ホンジュラス産のローズウッドがよく使われます。音板をはずしてくると巻き、パイプ部分は三分割。解体して車に積み、演奏会場に着いたら組み立て。演奏の後はまた解体して持ち帰ります。価格は、初心者用で約30万円、コンサートマリンバは220万円くらい。

マリンバはマレット（バチ）で音が変わるから、固さで色分けしてあります。佳代子さんのホームページ <http://www.marimba-music.com/>



福岡県久留米市の文化センター共同ホールにて、「九州マリンバ合奏団2005トリオ」の八音箱歌子さん(右)と塚崎美子さんを。



私の15年を知っている 木下楽器店の木下社長と

福岡・久留米83年の歴史を持つ木下楽器店。先代社長の鶴の一声で、まったく未知数だったマリンバ教室の立ち上げに協力してくれました。現在の本雅之社長も変わりなく応援してくれます。何か迷ったことがあると、ここに社長を訪ねるのが私の習慣。決めたい日は黒い選ぶことが多いですね。グッチのフランクで。



安倍先生との演奏会を主催する『アヴァンティ福岡』編集部にて

編纂の村山由香里さんとは幼馴染み。父の死後、数年ぶり指令。そのパワーで、安倍幸子先生の演奏会を裏現してくれました。打合わせも兼ねて、編集部を早く訪れます。九州での私の応援団といったところでしょうか。神戸に住む長女を訪ねた際に、菅屋のアン・レクレで買ったワンピースでシックに。



九州での私と東京での私 どちらも
 楽しめる自分ができあがりました



東京在住の教え子たちと 将来への熱い思いを語り合う

音大に送り出した教え子のうち5人が東京在住です。音大を卒業し、演奏家としてスタートを切った山口大輔君(右)、田島由理さん(後ろ)、片岡寛昌君(左)。懐かしい桐朋学園大学の音楽室にて。教え子たちと結成した「九州マリンパ合奏団2005」での演奏活動は私のこれからの夢のひとつ。長女がよく行く神戸ビブレで購入した若いコ向けのシャツで。

**最先端に触れるためには
 東京のショップが必要です**

東京での時間は、しばし東京と離れて自分と向き合う貴重なひととき。妻・母の顔を忘れて、東京在住の音楽仲間や友人と会ったり、新しい楽譜を探したり……。久留米の行きつけのセレクトショップで購入したセットで、リントっぽく可愛くまとめてみました。
 ヤマノ銀座ANNEX (03-3571-8100)にて。



東京在住の友人の案内で青山を散策

練習や打合わせの合間を縫って、青山のセレクトショップ「ガリャルダガランテ」(03-5766-1855)へ。店名の由来は、奔放でいうスペイン語。つついっ舞台で映えそうな服や面白い小物に目がいきます。福岡・久留米のセレクトショップでこの夏購入したスカートとタンクトップ、ボレロです。

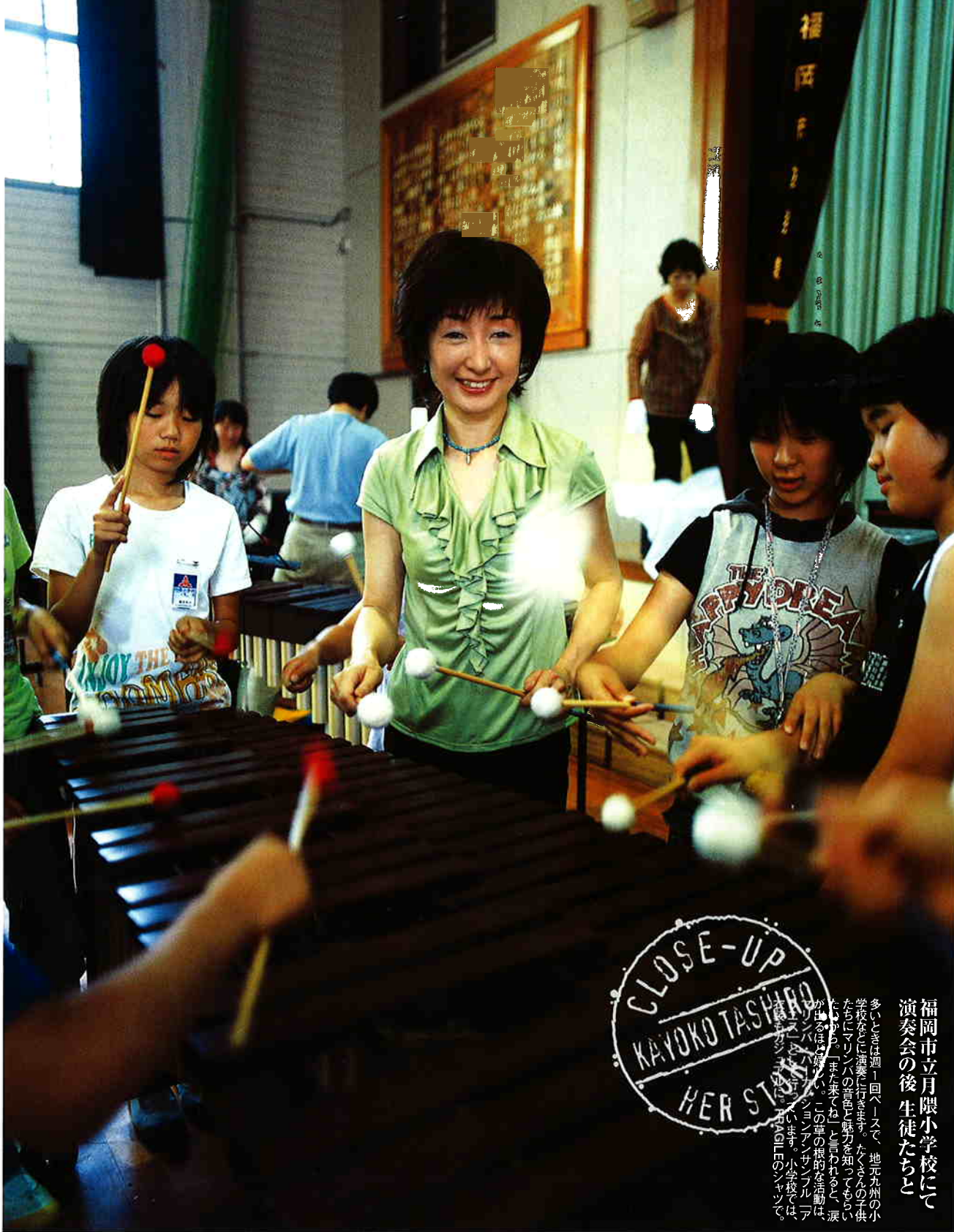


**友人との青山ランチは 体に
 やさしく 洗練されたイタリアン**

青山でインテリアショップ「プリンセスハウス」を経営する細見貴子さんは、高校の同級生。同世代が頑張っている姿は、ほんとに励みになります。筑波産の有機野菜や手打ちパスタが人気のイタリアンレストラン「エチェツッ カパチ」(03-5410-5353)にて。いつものデニムに、久留米のセレクトショップで購入したブラウスです。



地方にいたって音楽は学べるという 環境を整えることこそ私の使命です



福岡市立月隈小学校にて
演奏会の後生徒たちと

CLOSE-UP
KAYOKO TASHIRO
HER STORY

多いと毎日一回へースで、地元九州の小学校を巡回に行きます。たくさんの子供たちにマリンバの音色と魅力を知ってもらいたい。「また来てね」と言われると、涙が出るほど嬉しい。この草の根的な活動は、マリンバ演奏会を主催しています。小学校では、多岐にわたる楽器を扱っています。MAJIEのギャップで

音に触れるにはやはり東京。住まいと活動の拠点は九州でも、音楽家としていつも最先端を把握しておきたいのです。必要と思えば、無理して時間を作っても勉強に行きます」東京での佳代子さんに、家庭の匂いはありません。初対面の人は、たいてい独身だと思ってしまうとか。福岡でも、二つの自分を使い分けている面があります。

「田代は旧姓で、マリンバ演奏家としては田代佳代子。田代姓を使うのは、男の子に恵まれなかった父への親孝行のつもりです。妻・母としては齋藤佳代子。立場によって苗字が違うことで、切り替えがうまくいくという効能もありますね」

そして、デニムにTシャツで、家事に子育てにレッスンにと駆け回る日常の自分と、華やかな衣装を身にまとって舞台上立つ演奏家としての自分。舞台の上なら、普段はありえないキラキラとした服、派手な服も着こなすことができるし、それがまた楽しいのです。

「演奏会用の衣装は、毎年買い足して数十枚。大好きなデニムも、年によって微妙にラインが違ったり、毎年何本か買ってしまうですね。20本以上は持っています」

こんなふうには二つの世界を行き来できるのは、九州の地こそ、自分の居場所と心を定めたからと言えそうです。

「正直に言って、音楽における東京と地方のギャップは大きすぎるほど。でも、だからこそ、東京ではなく地方にいて、そのギャップを埋める役割を果たしたい。そういう音楽家はあまりいませんから。これこそ、私の使命だ。東京で通用する音楽家でありながら、九州でマリンバを普及させることこそ、私らしいあり方だと思えるのです」

子育てが楽になってきた頃から、佳代子さんは東京にしばしば足を運ぶことができるようになりました。

「クラシック音楽だからこま、日々進化している表現技術も変わっていきます。最先端の